みんぱくの顔『月刊みんぱく』

『月刊みんぱく』はどのように作られているの？
通巻 500 号を記念して読者の皆さんの疑問にお答えするとともに、
今号における制作の裏側を紹介したい。

499冊すべて並べてみました

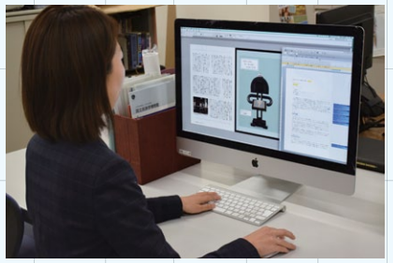
表紙は、創刊以降発行された 499 冊をエントランスホールの階段に並べて撮影した

広報誌はよく、自治体や企業、公共施設といった機関の「顔」といわれる。それらの活動やそこで働く人びとを、一般の方に広く紹介しているからだ。広報誌を見れば、その機関のおよその雰囲気から、今何を考え、次にどう動きだそうとしているかがわかる。だから、広報誌はひとつとして同じものはないし、同じ冊子であっても号によってその「表情」は異なる。みんぱくの広報誌である本誌も、みんぱくの「顔」である。一九七七年の創刊以来、読者の皆さんにさまざまな表情を見せてきた。

『月刊みんぱく』ができるまで

では、本誌がどのように作られているのか簡単に紹介したい。編集委員は本館の教員六名で構成され、その他デザイナーや編集実務をおこなうスタッフが制作を担っている。特集のテーマをはじめ、各号の表紙や誌面構成など、本誌のあらゆる事柄は編集会議を経て決定される。

制作工程は次のような流れだ。はじめに、執筆者を決めて原稿を依頼する。執筆者から原稿が送られてきたら文章をチェックし、写真を選定または館内のスタジオにて撮影。毎月開かれる編集会議にてそれらの内容が精査される。文章表現のみならず、写真や図版についてもこまかいチェックが入る。地図ひとつとっても、どこに国境を引くかで見解がわかれて議論が尽きないこともあった。おのおの異なる研究地域や専門性をもつ研究者で成り立つ編集委員だからこそ多角的に内容を精査でき、公正かつ一般読者に読みやすい誌面作りに努めている点は大きな特徴といえよう。編集会議で挙がった意見や提案をもとに著者校正とレイアウトを進め、編集長の最終確認を経てレイアウトデータを印刷会社に渡す。一週間後、冊子に仕上がった『月刊みんぱく』を手にしたときが、ようやくほっと一息つける瞬間である。



レイアウトソフトを使用して写真や文章を配置していく
（写真はすべて 2019 年撮影）

梅棹忠夫初代館長は、本誌をみんぱくの広報誌であると同時に「一般市民むけ学術ジャーナリズム」と位置づけていた。ここが他の企業や公共施設の広報誌と異なるところだ。制作に携わるうえで求められるのは、民族学・文化人類学への深い知識と社会に対する広い視野であろう。わたしたちは日々、収蔵資料を見る機会も教員や研究者との接点も多い。そのため、みんぱくのモノにもコトにもおのずと詳しくなり、「みんぱくは知れば知るほどおもしろい」と感じる場面が多々ある。それを体感しているわたしたちだからこそ、みんぱくや、ひいては民族学・文化人類学の魅力を今度は読者の皆さんに伝えていきたい。

★ 日本、大阪

Dr. みんぱくの現役時代を思い出して懐かしむ久保正敏本館名誉教授。14 ページに掲載した写真を撮影した日の一枚

回顧とあらたな発見

五〇〇号の準備は約一年前から進めてきた。この節目をどのように飾るのか、特に執筆者の選定や特集の企画に頭を悩ませた。『月刊みんぱく』のあゆみを特集でどう表現しようか。議論を重ねた結果、年表とともに変遷を振り返ることとした。これまで歴代編集長の座談会や寄稿といった形式はあっても、今回のように、『月刊みんぱく』自体が主役になってその足跡をたどるのは初めての試みだった。バックナンバーや関連資料の通覧に時間を費やす日々が続き、なかでも三〇巻を迎えた際の記念号（二〇〇六年二月号）は創刊から三〇年間の出来事を調べる際にとても重宝した。また、資料ではわからない情報については当時の編集長に取材をしてまとめあげた。

案の定、歴史をたどる作業は容易ではなかったが、こういう機会だからこそ知り得たこともたくさんあった。そのひとつが、創刊当時の資料（二ページ写真参照）を初めて目にしたことだ。何度も更新を重ねた編集会議の資料。赤字でこまかく指示が書き込まれた指定紙。パソコンのない時代、すべて手書きのせいか、そのときの制作現場がリアルに想像できた。みんぱく設立を目前に控え、一から広報誌を作るのはとても労力のいるものだったと推察できるが、そこから始まった本誌の歴史が今日まで脈々とつながっていると思うと、通巻五〇〇号という重みを改めて実感した。

また、今号の「想像界の生物相」でとりあげられた「Dr.みんぱく」を実際に見られたことも印象的だった。十数年前、展示場で電子ガイドの先駆けとして活躍していたDr.みんぱくだが、現在はひっそりと倉庫に保管されているため実際に見たことがなかったからだ。当時の様子について見聞きできた充足感と同時に、情報技術やそれをとり巻く環境の移ろいの早さに寂しさも心に残った。

500 号に至るまでの執筆者数や総ページ数など、本誌にまつわる数字をデザインした表紙案。今回、惜しくも採用にはならなかった

五〇〇号は通過点

現在、本誌はバックナンバーを含め最新号まで、本館の「探究ひろば」で閲覧できる。展示を観覧される方には気軽に立ち寄っていただきたい。また、ホームページには二〇〇五年四月号以降の誌面（最新号は発行翌月に公開）が掲載されているほか、視覚障害者の方にも読んでいただけるよう音訳の公開も進行中だ。以前よりも皆さんにとって読みやすい環境が整ってきている。

本誌は五〇〇号という大きな節目を迎えたが通過点にすぎない。今月はどんな「表情」を見せてくれるのか。読者の皆さんには、そんな期待を抱きながら手にとってもらえるような『月刊みんぱく』を、これからも届けていきたい。

（本誌編集室　内藤美咲）